

日本聖公会東京教区 大森聖アグネス教会

冬ごめ便り



248号

2024年10月27日発行
編集・印刷：
馬込便り編集グループ

日本聖公会 東京教区 大森聖アグネス教会
管理牧師 司祭 シモン・ペテロ 上田憲明
〒143-0025 東京都大田区南馬込 1-58-8
Tel&Fax (03) 3771-3459
Eメール：agnes.tko@nssk.org
ホームページ：www.nssk.org/tokyo/church/oomori/



巻頭言

《自炊と自由》

司祭 ダビデ 市原信太郎

仕事場として使わせてもらっている部屋に立派な台所がついており、弁当を持参する代わりに職場で自炊しています。運搬は困難な麺類や鍋物も食べられる、野菜を多く摂れる、などの具体的なメリットもありますが、私が最も楽しんでいるのは、その「自由」です。「孤独のグルメ」というテレビドラマの冒頭では、こんなナレーションが流れます。「時間や社会にとらわれず幸福に空腹を満たすとき、つかの間彼は自分勝手になり自由になる。」まさにそんな感じで、自分一人が食べるものを自分で料理している時間は、日常のしがらみから解放される貴重な気分転換になっています。学生寮の食堂を生徒たちが自主管理していた旧制高校には、「自治即ち自炊」という標語もあったそうで、自炊は自治・自由の表現ともなっていたわけです。

この反対に、食の自由が失われる辛さもいろいろな所で感じてきました。以前、香港で一週間の国際会議

に参加した際、毎日大変なご馳走が供されましたが、一方ですべての食事はジャンルで言うところの「中華料理」で、欧米系の参加者はだんだん冴えない顔になっていきました。私ですら、食事のない自由行動の時間には近所のフードコートへパスタを食べに行つたくらいですから、かなり辛かったことでしょう。食い意地の張った我が家の犬も、結局我々が提供するものを食べる以外の自由がなく、たまに鶏肉などのご馳走にありつくと文字通り目の色が変わって、なんだか気の毒な感じもします。

「『やるな』と言われるとやりたくなっちゃうのはなぜ?」という「チョコちゃんに叱られる!」の答えは、「人間は自由な生き物だから」でした。自由が阻害されると、それを補うために反対の行動をとろうとするのがその理由だとか。人間の自由への渴望は、その命を支える根源的な行動である「食」において、最もわかりやすい形で現れるのかも知れません。

初期のキリスト教は、本来食事を共にするはずのない支配階級の人と奴隷階級の人すら、共に食卓に着くという自由な食事の姿を通して、大

きなメッセージを伝えていました。ですから、聖餐は私たちに与えられた自由を適切に行使する責任をも伴うものでもあります。

食の自由を通して感じる喜びは、私たちに神が与えておられる自由を思い起こさせるものだと思います。そして、「自由へと召されたあなたがたは、愛をもって互いに仕えなさい」(ガラ五・十三―十四)とパウロが言うように、神に与えられ、イエスが十字架により贖ったこの大切な自由を、私たちはただ自己満足のために使うのではなく、他者のために差し出すよう求められています。奇しくも、アグネス教会の「外」向けプログラムには、何らかの形で「食べること」が伴っています。これらのプログラムが、私たちが神によって自由な者として創造されたという根源的な喜びを、広く分かち合う機会となるよう祈る次第です。

